

〈研究ノート〉

パプアニューギニア、タパ村再訪報告

福本繁樹¹

要旨 筆者は1969年から1990年にかけて十数度、のべ2年あまりにわたって南太平洋各地へ美術探査にでかけた。現地には仮面や神像の古いものはほとんど失われていたが、土器、貝貨、装身具、棒締め染めのパンダナス布、タパ（樹皮布）など、一部の工芸品は根強く伝えられていた。私は各地に知られざる美術を訪ね、人々の生活や美術を写真におさめ、美術品のコレクションをすすめた。以後南太平洋への旅を控えていたが、2020年のコロナ禍があやしくなりはじめた2月に15日間、パプアニューギニアのMaisinの人々のタパ村を42年ぶりに再訪した。

タパとは、世界各地でつくられた原初的な布で、現在でも世界の熱帯地域を中心に伝えられ、おもに衣料として利用されてきた。私は数十年前のMaisinのタパ・コレクション100枚余の写真を現地に持ち込み、データの追収集を試みた。タパの制作工程を再調査し、過去にタパの材料として利用されていたと思われる野生種のタパの木を密林に探し、村人にその樹皮からタパの試作を依頼。それぞれの幹、樹皮、試作したタパなどのサンプルを持ち帰った。またポートモレスビーの国立博物館所蔵のMacGregor タパ・コレクションを観察する機会を得た。

キーワード：タパ、パプアニューギニア、Maisinの人々、MacGregor コレクション

I はじめに

筆者は1969年から1990年にかけて十数度、のべ2年あまりにわたって南太平洋各地に美術探査にでかけた。当時南太平洋では奥地や孤島といえども近代化の影響もあり、伝統文化の変貌や衰退がすすみ、現地の美術品がさかんに海外に持ち出されていた。20世紀初頭からヨーロッパで人気があったという仮面や神像は、現地には古いものがほとんど失われていたが、まだよく残された伝統文化もあった。たとえばパプアニューギニアの土器、ソロモン諸島の貝貨や装身具、バヌアツの棒締め染めのパンダナス布 (mat money)、

それに各地のタパ（樹皮布）など、一部の工芸品は根強く伝えられていた。私は手遅れにならないうちにと、南太平洋各地を忙しく訪ね、人々の生活や儀式などを観察し、工芸品などの製作を取材し、写真におさめ、美術品のコレクションをすすめた¹⁾。

1990年の探査行を最後に南太平洋を訪れることがなくなったが、その後、欧米豪各地の博物館にオセアニア美術のコレクションを訪ねた。かつてはオセアニア美術といえば、欧米では仮面や神像などの彫刻に関心が偏っていたが、今世紀になってタパ（樹皮布）や編み布、装身具、土器など、工芸の研究や展示が以前にも増してみられるようになり、工芸品への関心が高まっているのを感じた。

1：立命館大学環太平洋文明研究センター

筆者が手がけたコレクションは、国内各地や韓国、インドネシアなどで展覧する機会を得た²⁾が、とくに2013年のジャカルタのテキスタイル・ミュージアムにおけるタバ展開催のおりには、美術館のスタッフらと共に、スラウェシ島中部Bada地区のタバ村Gintuまででかけ、久しぶりのリサーチとなった。また1917-18年には東京と大阪でタバを展示する機会を得て、この日本でもタバへの関心が高まっているのを感じた。

そんなとき、立命館大学環太平洋文明研究センターの矢野健一教授から、南太平洋美術のコレクションの整理をすすめ、現地にタバ村を再訪するようにとの提案をいただいた。先生の助言や協力を得て、2020年のコロナ禍があやしくなりはじめた2月に15日間、パプアニューギニアへ30年ぶり、奥地のタバ村へは42年ぶりの再訪が実現した。ここにその探査行の概要を報告したい。

ちなみにタバ(樹皮布)とは、世界各地でつくられた原初的な布で、現在でも世界の熱帯地域を中心に伝えられ、近代まで機織り文化が伝えられなかった地域で、おもに衣料として利用されてきた。とくに広大な海洋のなかに孤立した文化を伝えた南太平洋地域でタバが発達した。「タバ」の名は、今日では世界的に一般化しているが、もともとポリネシアの一部の地域における樹皮布の呼称である。

今日われわれが目にする布は、ほとんどが織物である。辞書でも「布」は「織物の総称」、「textile」は「織物」と説明されるように、布が織物であるのが自明のごとくである。しかし、織物よりもはるかに古い歴史の、織物以外の布がある。そのひとつがタバである。

クワ科植物の茎の心質と表皮の間にある強靱な繊維は、靱皮繊維と呼ばれ、布や紙の材料となる。それを糸にして織れば麻布が、ば

らばらにしてほぐしてから漉くと和紙が、叩きのばせばタバができる。カジノキなどのクワ科植物の樹皮は、比較的容易に木芯部から剥がれ、外皮を除き、内側の靱皮繊維だけをとりだし、木の台の上で叩き棒をもちいて根気よく打ちのばしたのがタバである。

かつてハワイやタヒチでは、華麗な紋様と繊細な風合いのタバがつくられていたが、白人の入植後まもなくすたれてしまった。しかし今日なお盛んにタバをつくっているところも少なくない。大胆でユーモラスな紋様を多彩にみせるパプアニューギニア、孔版による綿密で整然とした装飾紋様を発達させたフィジー、巨大さにおいて発達したトンガなど、地域によって特徴的なタバが伝えられている。

パプアニューギニア東部ノーザン州のMaisinの人々がつくるタバは、褐色を帯びた荒い風合いに、黒と赤の手描きによる独特の紋様が、力強い魅力にあふれている。礼装用のタバには、氏族に代々受け継がれてきた神話や伝説のモチーフが紋様としてほどこされ、ちょうど日本の家紋のように、家系や親族の由緒を物語る。タバの製法を伝受することは、布や紋様の造形とともに、神話・伝説などの口承文学を正確に習得してゆくことにもなる。タバを装うことは、紋様にこめた氏族の誇りや名誉を身につけることである。そこに、快活でダイナミックな紋様の秘密があるのだらう。また、布そのものよりも紋様を身につけることを第一義とする構造は、入れ墨や化粧の文化と密接である。布が「第二の皮膚」であることや、装飾の本来の意味を顕示するようだ。

II タバ村再訪の目的、探査行程、成果

1 目的

今回の目的地をパプアニューギニア、ノーザン州とし、Maisinの人々のタバ文化を再調査することにした。フィジー、サモア、トンガなどの再訪や、まだ訪問したことのないフィジーのラウ諸島や、ポリネシアのウォリス・フツナ諸島なども候補地として考えたが、もっとも観光地化がすすんでなく、情報を得にくく、今日なおタバづくりがさかんな地域としてこの地域を選定した。

私と Maisin の人々との関わりは 1969 年の最初のパプアニューギニア訪問からはじまる。ポートモレスビーの博物館や美術商、各地のホテルなどでタバを多くみかけた。1971年にノーザン州の Popondetta で Maisin のタバのコレクションを撮影し、タバ1点を持ち帰った。1978年にやっとタバを製作する村を訪れる機会を得た。

1978年の8月、私はポートモレスビーから5人乗りのセスナ機で約1時間、東海岸の Wanigela に着き、そこから海浜を南に約5時間歩いた。一つの岬と三つの河口を越えると海に面した家並みがみえてくる。そこが Maisin の Uiaku 村である。村ではタバ作りの名手として Iris Wea (当時推定56歳、Wondi 氏族) を紹介され、村に3日間滞在して Iris 夫婦からタバについて説明を聞いた。1981年の4月には、京都の和装帯メーカー株式会社じゅらくの見本市「じゅらく大博覧会」のため Maisin の舞踏団10名を招聘することになった。Maisin の人々の盛装、舞踏、タバ製作のデモンストレーションが呼び物となった。そのとき約100枚のタバを入手した。

今回の訪問は、それから約40年後となった。かつての人々と再会するには年数が経ち

すぎていると思われた。はたしてみんなどうしているだろうか、タバ文化や、今日の人々の暮らしはどうなっているのか、私はかつての記憶や記録を、今日の眼でもう一度みなおすことに、あるいは意義を見いだすこともできるのではないかと考えた。

今回の訪問に際しては、事前に以下の4つの目的を考えていた。

1. この地方で約40年前に収集した100点余のタバのコレクションについて、紋様や産地など、データの追収集
2. タバ制作工程と紋様の現状再調査
3. 過去においてタバの材料となったであろう野生種のタバの木についての調査
4. ポートモレスビーの国立博物館(National Museum and Art Gallery) 所蔵の William MacGregor タバ・コレクション取材

2 探査行程

探査行程は、2020年2月12日から26日まで15日間で、筆者の福本繁樹と、立命館大学大学院生の駒井翔と二人ででかけた。

- 12日(水) 関西空港 20:55 発の夜行便 JQ16 で出発
- 13日(木) Cairns 経由、ポートモレスビー 着 13:20、日本大使館訪問
- 14日(金) 国立博物館訪問、国立大学書店、Boroko Market。午後 PNG Air CG1674 で Port Moresby 発 15:10、Tufi 着 16:00
- 15日(土) 朝Tufiからチャーターボート(150馬力)で南約40kmのタバ村 Ganjiga へ
- 16日(日) Ganjiga、Uiaku 村にてタバの紋様調査、制作工程取材
- 17日(月) Ganjiga から村のボート(40馬力)をチャーターして約20km南の Marua、Airara 村へ
- 18日(火) Marua Point から Marua Station No.2 へ、密林へ野生のタバの木採

取へ徒歩ででかける

- 19日(水) 野生のタバの木から、古来のタバ制作実験依頼、3種の木を試す
 20日(木) 午後 Marua Point から Tufi へチャーターボート (150馬力) で帰る
 21日(金) Tufi からポートモレスビーへ。
 Tufi 発 16:30、Port Moresby 着 18:10
 22日(土) 駒井翔、早朝帰路へ。福本は Adventure Park, Boroko Market など訪問
 23日(日) Oro 州のタバを販売する Orotapa のオーナー Ethel Borari 母娘に取材。在パプアニューギニア日本国大使館一等書記官岩本洋光夫妻と懇談
 24日(月) 国立博物館訪問、電気系統の故障や担当者出張で取材できず、国立大学の書店で資料購入、Boroko Market で資料など購入
 25日(火) 国立博物館に終日滞在、acting chief curator の Grace Guise-Vele 氏の協力を得て、William MacGregor コレクション観察
 26日(水) Port Moresby 発 8:20 PR216、マニラ経由で大阪空港着 19:10、帰宅

3 成果

ポートモレスビーから東海岸の Tufi へは、定期航空便があり、Tufi には美しいフィヨルドの海岸をひかえたリゾートホテルがある。ここに泊して翌朝チャーターボート (150馬力) で南約 40km のタバ村 Ganjiga へむかう。この地域には海賊がでるという在パプアニューギニア日本国大使館からの忠告をうけて、大型のスピードボードに救命胴衣を用意して急行した。一時間あまりでタバ村に無事到着。

タバ村再訪まで数十年の歳月が経っていたが、タバ村のようすは昔ながらのようにみえた。しかしスマホやソーラ発電が普及し、40

年前にみられたトップレスの女性や、この地方の伝統である女性の顔面文身がみられなくなっていた。顔面文身は 1990 年代に廃止され、40 歳後半以上の女性にしかみられなくなった。またこの地方でも海面上昇による海浜浸食の深刻な被害があり、村全体が内陸への移転を余儀なくされたり、沈下する村に水たまりができ、海浜から砂をはこんで埋めることが若い女性の日課となっていた。また以前には少し大きな村であれば、豊富な日用品や食品などを販売する店がかならずあったのだが、訪問した Maisin の村々ではそのような店が一件もなく、物流が滞り、経済状況は以前より悪化しているようだった。

現地では 4 名の村人と再会をよろこびあうことができた。4 名とは、1981 年に来京した 10 名の舞踏団のリーダーだった Jhon Christenson Taniova (93 歳、Waigo 氏族)、おなじ舞踏団の一員だった Edith Yanten (74 歳、Tatan 氏族)、1978 年の訪問時には少女だった Iris の姪 Annie Freda (47 歳)、1971 年に Popondetta でタバのコレクションをみせてくれた Rebecca Gageyo (78 歳、Kaufea 氏族) である。Ganjiga 村では Ross Kania (58 歳 Muyo 氏族) とその家族らの世話になった。Ross Kania は 1998 年にサンフランシスコ、ロサンゼルス、2001 年にシアトル、バンクーバー、トロントでのタバの展示のため出張したという。また Marua、Airara 村では長老の Taniova 氏と Edith、Edith の家族の Featus (次男)、Charles (三男)、Giblin (四男) らに調査の協力を得た。今回の探査行の成果を要約すれば以下のごとくである。

1. 数十年前のタバ・コレクション 100 枚余の写真を現地に持ち込み、データの追収集を試みた。それぞれの氏族が紋様を秘密裏に伝え、過去の記憶があやうくなり、村人が広範な地域に散在して

- いるなど、詳しいデータ入手が困難だった。
2. タバの制作工程を追調査。1978年当時と基本的差異はなかったが変化もあった。女の独壇場だったタバ制作に、1980年代から男が関わるようになり、今世紀になってからは景気の悪化もあり、タバの売れ行きも鈍化して、タバ文化も萎縮してきた。反面、名誉にかかわる氏族の紋様については保守的だった。今回、氏族の紋様を施した11点のタバを収集した。
 3. 伝統文化の著しい変容を観察した。不況経済、海浜浸食による被害、森林伐採企業の進出を防ぐ裁判などの資金のために、タバ販売が主要な収入源となり、1988～2004年にはMICAD (Maisin Integrated Conservation and Development) による組織的なタバ販売のとりくみがあった。そのころがタバ生産の最盛期だった。
 4. 過去においてタバの材料に利用されたとおもわれる野生種のタバの木は3種あると村人から聞き、それを密林に探し、その樹皮からタバの試作を村人に依頼。それぞれの幹や樹皮の断片、試作したタバなどのサンプルを持ち帰った。
 5. ポートモレスビーの国立博物館所蔵のWilliam MacGregor タバ・コレクションは100点以上あり、そのカード100枚余りを複写し、実物のタバ20点を観察、撮影。タバ5点の微細な断片をDNA鑑定のため許可を得て持ち帰った。

Ⅲ タバの製作

Maisinの人々にとってタバ製作は、他の南太平洋の島々と同様、女の仕事である。

1978年の調査では、とくに黒の施文の場面を男がみることをタブーとしていることを見聞きした。女は男を耕作や狩りなどに送り出してから、タバ制作の仕事にかかる。隠しておいた黒い染料をとり出して、留守中にタバに施文を終える。男もこのことを心得ていて、突然帰宅することはない。(しかし古来の風習も変化し、1990年代から男がタバづくりに参入するようになり、施紋に関するタブーもうすれてきた)。

タバの材料となる桑科の木は *wuwusi* と呼ばれ、畑で栽培する。乾期がはじまる4月ごろ、*wuwusi* の根元から生える若木を株分けして移植する。若木が背丈より高くなるまで、枝になる新芽を摘みとらねばならない。枝ができるのと幹に節ができ、その樹皮に残った節穴がタバの穴となってしまう。若い木の樹皮ほど白くやわらかなタバができるが、この地方ではタバを張り合わせたり、継ぎ合わせたりせず、一本の木の樹皮から一枚のタバをつくるため、目的のタバの幅に応じた幹の太さになるまで *wuwusi* の木を栽培する。幅80cmのタバをつくるには、直径6cm程度の幹が必要である。

wuwusi の幹を伐採して村にもち帰り、もろい外皮を貝殻の道具 *feo* で掻き落とし、内皮を木芯部から剥ぎとる。厚さ数ミリの褐色をおびた白い内皮がタバの材料となる鞣皮で、やはり *wuwusi* とよばれる。剥ぎとった鞣皮は、その日のうちに布に仕上げる。ぬれた手で水をなでつけて鞣皮を湿らせ、丸太の上で根気よくリズミカルに打ちつづけると、樹皮はだんだんと幅がのび、やわらかく薄くなる。鞣皮が裂けないように、縦にそろった繊維に対して絶えず斜めの角度に叩き棒を打ちおろす。約1時間で鞣皮の幅は4～5倍にのびる。洗濯物のようにローブにかけて一夜干したタバは、縁をまっすぐに切ってそろえ、

四つ折にたたんで、寝具となるマットの下に保存する。そして黒色染料で施文し、赤色染料で彩色する。

1 タバ生産の盛衰

パプアニューギニア南東部のノーザン州の人々の伝統的な盛装は、多彩な装身具と、タバによる衣料などによる装いだが、とくに装身具は、各種の貝、ブタ・イヌ・イルカなどの歯牙、多彩な熱帯鳥の羽毛、編み細工など、貴重な材料と手の込んだ加工による豪華なものである。

Francis E. Williams は、Maisin の北方に住む Orokaiva の人々の装いを記述している。タバは *bo*、タバの褌は *bo-abo* と呼ばれた。タバの褌は長くつくられ、素朴で効果的な紋様が描かれた端をエプロンのように前にたらししていた。若い女は短いタバの腰巻きを、年配の女は動きにくそうな長めの腰巻きをして、ベルトで締め、前にタックを入れていた。内陸や海岸地方の女は思春期以降、河川の人々は結婚後に腰巻きをした。白人の影響によって全裸はなくなってきたが、Aiga や Binandele の若い女は全裸で羞恥心もなく平気だった。初期の入植者のレポートでも、住民はほとんど裸で生活していたという。1895年には Mambarek の人々はほとんど全裸で暮らしていたといい、MacGregor によれば Gona Bay では少し前まで男はタバの褌をしていたが、多くは裸だった、また Ope では男は全裸だったという。しかし Williams は、最近ではめったに全裸を見られなくなったなどと記している。(Williams 1930: 32-34)。

ニューギニアをはじめメラネシアでは、祭事の盛装には絢爛な装身具とタバの衣服などで豪華に飾るが、かつて日常的には全裸ですごしていた例が意外と多かったことも留意しなければならない。タバによる衣装は、肌を

隠すことよりも、装飾に目的があったようだと推測できる。

Maisin 周辺には Ubir, Oyan, Onjob の人々が住んでいるが、タバの名は Maisin が *evovi* とするのに対して、それぞれ *beberu*, *beberu*, *gewano* となる。また Gulf Province の Maraulau 地方のタバは *mak-sii* と呼ばれ、タバの名は地域によって多様で互に関連性が希薄である。ポリネシアでは広範な地域で同じ名で呼ばれたり、呼び名に関連性が認められたりすると対照的である。この事実は、パプアニューギニアのタバの歴史の古さや、人々の保守的な閉鎖性に由来するのだろう。

パプアニューギニア東南部でタバづくりの中心となってきたのが Maisin の村々で、古来 Maisin のタバが交易によって一帯に流通していた。1978年にタバ村を訪問したときは、あちこちの家からタバをつくる叩き音が聞こえ、随所で製作中のタバを干していたが、今回はそのようすがなく、タバ製作の勢いは以前ほどではなかった。Maisin のタバはもともと、現地の人々にとって儀式や生活に必要とされ、衣類や装飾に欠かせないもので、交易の商品ともなっていた。また民族、氏族の誇りやアイデンティティとしても重要だった。しかし近代になって海外から工業製品の衣服などが輸入され、タバの機能が変化してきた。1971年当時、日常着としてのタバは一部の年配者にしかみられなかった。一方、国内外のマーケットで Maisin のタバが評価されてきた。マーケットでどのように評価されてきたかを確認すれば、かつての活況と今回の沈滞の背景が理解できる。

Maisin のタバは、1890年にヨーロッパ人が最初に接触して以来、現地にやってきた行政役人、学者、宣教師などの欧米人に注目された。第一次世界大戦前には、タバやその他のコレクションは、オーストラリア、イギリ

ス、オーストリアの博物館に寄贈、販売された。1930年代までには、タバは現地の教会で祭壇の布や壁の装飾品として使用されていた。1960年代にはパプアニューギニア独立へむけて、ヨーロッパ人の短期入植者が急増、タバの壁掛けが安くて魅力的な記念品となり、国内の工芸品店でタバの需要が高まった。1980年代初頭までには、タバはコブラを抜いて地域の主な市場商品となり、生産が拡大した。1980年代に、タバはCollingwood湾の、とくにMaisinの象徴となった。ニューギニア航空の機内誌『Paradise』がMaisinの生活とタバの特集を組み、州政府発行のハンドブックの表紙をタバのデザインで飾り。新国会議事堂の議場にタバのデザインのモザイク画が描かれた。タバはCollingwood湾での森林伐採反対キャンペーンのシンボルとしてとり上げられた。1988年から2004年にかけてMICAD (Maisin Integrated Conservation and Development) によって組織的なタバ販売活動がおこなわれた。2002年に伐採者に対する国内法廷でMaisinの人々が勝訴して、環境問題への支援の手が控えられるようになり、皮肉にも環境問題とともにタバへの国際的な関心を減じることになった。2007年11月のサイクロン「Guba」がタバや作物畑に壊滅的な打撃を与えた。(Hermkens・Barker 2017: 103-104)

今回の調査で明らかになったことだが、1988年から2004年のMICAD活動時期がもっともタバ生産が盛んだったとおもわれる。この時期に女の独壇場だったタバ生産に男が参入するようになり、タバの穴を糊付けによって補修することもはじまった。また多様で奔放、素朴だった古いタバの紋様に比較して、紋様の一様化、様式化がすすみ、タバの見映えも大きく手際よく改善されていた。量産されたのは、氏族の紋様ではなく、

交易で売り出すための一般的な紋様のタバが中心となった。

今回の探査時期には、タバ生産が1978年の訪問時に比較して低調になった反面、氏族に伝えられる紋様のタバを、誇りをもって伝えている保守性も認められた。タバはMaisinのシンボルであることには根強いものがあり、人々にとって不可欠であることには変わりがないようにおもわれた。

2 タバの素材と加工

今回の探査行は15日間だったが、ポートモレスビーの大使館や博物館への訪問、諸手続きや移動などに日数がかかり、奥地のタバ村に滞在できたのは5泊6日だった。タバ村Ganjigaに到着すると、さっそくタバの製作実演を依頼したが、その日あいにく村では死者がでたという。村で誰かが死ぬと3日間は村人全員が静粛にしなければならず、タバを作る叩き音や、カヌーをくり抜く斧の音などの騒音が禁止される。そのためわれわれのGanjiga村滞在中は、音の出ない施紋の工程のみを実演するという。タバを叩く作業は、南隣の村Marua、Airaraで見せてもらうことになった。

今回の調査目的の一つに、過去においてタバの材料に利用されたとおもわれる野生種の木についての調査があった。私が1978年にIrisから聞いた話では野生種は*korifi*, *tirim*, *manrouro*, *sifa*, *waito*, *kaembobi*, *bori*の7種があるということだった。前者から後者へと、より良質の品種に換え、現在の*wuwusi*に落着いたという。そうであれば*wuwusi*は古来のものではなく、比較的新しい時期に普及したものと考えられる。そのため、野生種のタバについて詳しく調べる必要があるだろうと考え、村人に野生種のタバの木について尋ねてみた。年配者らに尋ねたが、7種のうち、



図1 タバの素材見本

左より, *wuwusi*, *kaembobi*, *korifi*, *bori* の幹と樹皮。

korifi, *kaembobi*, *bori* の3種しか聞き出せず、あとの4種については誰も聞いたことがないという。村で指導的な長老の Tanioba に問いただしてもそうだという。野生種からのタバは荒く褐色をおびるが、太く育つ幹から大きなタバを得ることができ、とくに *kaembobi* は大きな敷布などに活用したという。しかし長い間野生種のタバを製作することがないらしい。

私は Marua 村から数人の村人とともに内陸部に徒歩で踏み入り、野生種のタバの木を探しにでかけた。そして3種の野生種と栽培種、つまり *korifi*, *kaembobi*, *bori*, *wuwusi* の幹を集め、村人にその樹皮からタバを試作するよう依頼して、それぞれのタバの生地製作を観察した。野生種のタバの木採取と試作には Edith とその家族たちがこぞって協力してくれた。そしてその材料と、加工したタバを持ち帰った。

(1) 現在の栽培種 *wuwusi* からタバ製作 (図2~4)

6ヶ月ほど成長した径4~5cm、長さ116.5cm

の *wuwusi* の幹を伐り、樹皮を得る。Charles が堅固な丸太の台 *fou* の上で内皮の内側の白い面をくまなく、鉄製の叩き棒 *fisiga* で約12分間叩きつづける。次に二枚折りにして水分を手でなすりつけつつ約7分叩く。また反対に二枚折りにして叩きつづけ、四つ折りにして叩く。これまで約30分間で巾は34~35cmとなる。ここで平たい木製叩き棒 *fou* に持ち替え、樹皮を折り畳み、巻き上げて叩く。巻き上げた樹皮の中央から左端へ、また中央から右端へと叩く。45分後約54cm巾となる。

(2) 野生種 *korifi* からタバ製作 (図5~8)

korifi の太い幹からはがした樹皮20~28cm巾。樹皮から粘りのある樹液をだす。樹液は黒く変色し、手についても落ちにくい。内皮は白いが、製作している間にも褐色に変色する。Charles が1時間あまり注意深く叩くがすこし破れた。破れたのは叩き方よりも樹皮の品質のためとおもわれる。

(3) 野生種 *kaembobi* からタバ製作 (図9~12)

Kaembobi は現在でもよく知られているタ



図2 栽培種のタバ *wuwusi* (99 × 57cm)



図3 *wuwusi* の韌皮を *fisiga* で叩く様子



図4 現在の栽培種 *wuwusi* から
タバをつくる様子

Charles Yanten。1990年代から男がタバ製作に参入するようになった。



図5 野生種 *korifi* の白生地 (105 × 45cm)



図6 *korifi* の幹を伐採する様子



図7 野生種 *korifi* の若木から樹皮を採る様子



図8 Charles Yanten が
1時間あまり注意深く叩く様子



図9 野生種 *kaembobi* の生地 (108 × 67cm)



図12 樹皮を叩く Festus Yanten



図10 *kaembobi* の木
イチジクの実がなっている。



図11 外皮を掻き落とす様子
貝の道具を用いる。

パの野生種。大きな桑のような葉でイチジクの実がなる大木。実は熟すと黄色になるが食べられない。外皮は緑色で、それを掻き削ると白い内皮が表れる。*wuwusi* より幹から剥がれにくく、叩きの作業で破れ易い。大木に成長するので大きな敷布などに用いられた。80×33~36cm、厚さ約3mmの樹皮を55分間叩きのばすと70×113cmの大きさにのびた。繊維の縦方向には少しちぢんだ。

(4) 野生種 *bori* からタバ製作 (図13~16)

bori の大木の樹皮を加工するよう依頼。幹の径約6cm、樹皮の巾18~20cm。木製台 *fou* の上で鉄製の叩き棒 *fisiga* で35分間叩きつづけるが、樹皮の繊維が破れて制作中断、30分くらいであきらめる。硬くて褐色のぼろぼろの生地となる。

おなじ野生種 *bori* のでも、若い幹の樹皮からは破れることなくうまくできた。62×14~15cm、厚み1mmの若木の樹皮は水分が多く、褐色の老木と比較して色が白い。12分間叩きつづけて58×42cmにのびた。乾燥するとすこし縮む。おなじ品種でも、成育条件や樹齢などによっても異なった品質のタバができるようだ。

(5) タバの生地の節穴補修 (図17・18)

1990年代になり、タバにある節穴に裏か



図 13 野生種 *bori* の白生地 (97 × 53cm)



図 15 野生種 *bori* の白生地 (56 × 40cm)



図 14 *bori* の樹皮を叩く Gablin Yanten



図 16 *bori* の樹皮を叩く Edith Yanten

らタパの小片を糊付けしてふさぐ補修をはじめたという。糊には *kafioti* という木の実（径8mm程度の球形）を指でつぶして出てきた透明な粘液を用いる。表からは補修の痕が目立たず、施紋すれば、補修の痕がさらに分らない。穴が多いタパは粗悪だと思われるので、このような補修を始めたという。

3 タパの紋様 (図 19～21)

タパの施紋は古来より女の仕事である。特に、家系の氏族が所有する氏族の紋様 *evovi* は、過去から引き継がれ、自分たちが盛装するときは、この氏族の紋様を着用する。紋様には名前と意味があり、他の氏族が真似ることができず、販売するためのものではない。

販売のための商品として生産されるのは、*amoa kayan* と呼ばれる幾何学的なデザインで、「単なるデザイン」「一般的なデザイン」という意味で、十数ミリ巾の平行曲線やそれに添った列点、平行曲線にはみ出さないように施される赤の彩色など一定の紋様様式が認められる。様式に従って自由なバリエーションで即興的に描かれ、紋様に特別な名前や意味がない。

Maisin のタパには紋様のくり返しのフォーマットがある。巾のひろい敷物や女性用腰布の *evovi* は4回、男性用褌となる細長い *evovi koifi* は6回、同様のパターンがくり返される。それぞれ布を四つ折、六つ折りにして、各面にいっぱい同様のパターンを描く。



図 17 タバの穴の補修
裏面に小片を貼りつけて穴を補修する。



図 18 *kafioti* の実と接着の様子
実の汁が接着剤となる。



図 19 Alice Daima 着用の *evovi*
(1981 年収集、67 × 135cm)

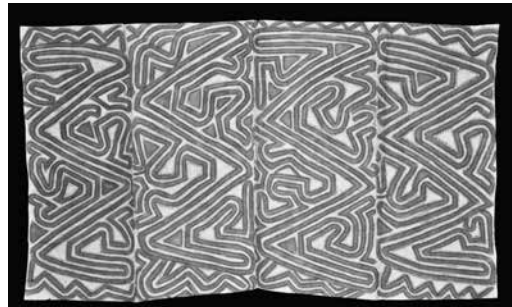


図 20 *amoakayan* (1981 年収集、93 × 156cm)

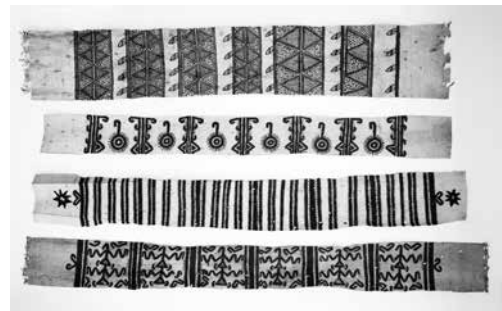


図 21 *evovikoif* (2020 年収集)

折り畳むことによって一面ずつ別に描き、その間には他の面は隠れているので、前に描いた面を振り返らずに描く。そのため細部に变化のある紋様がくりかえされ、ときには四面のなかに上下反対の紋様が混じることもある。したがって *Maisin* のタバには、氏族の紋様として二種、幅広の *evovi* と、禪として利用される *evovikoifi*、そして一般的な紋様の *amoakayan* の三種に大別できる。

(1) 黒色染料の施紋 (図 22・23)

黒い染料 *mie* は、こまかくちぎった *wayangu* と呼ばれる植物の葉 (1978 年には *karawagon* と聞いた) と、川底の粘土 *mie* (*yabumie*) と、椰子殻を焼いた炭 *kumuti* に水を加えて混ぜ合わせたもので、タコの墨を加えることもあるという。長期間保存することができ、この発酵臭が男性にたいするタブーの理由だと 1978 年に聞いたが、一度煮沸すると匂わなくなるという。箒草 *nasa* の枝 *naska* をペンがわりに用いて黒い細線や列点を描く。



図 22 施紋する Christabel Seri
染料の横にあるのは wayangu の葉 (Ganjiga 村にて)。



図 23 黒色染料 mie の施文
(Jacqueline Taniova : 1964 生)
筆で 2~3 回なでつけ描線の濃度をあげる。4 面に
パターンをくりかえすが、一面をしあげるのに約 20
分かかった (Airara 村にて)。



図 24 saman の木



図 25 アルミ鍋での煮沸の様子
saman の樹皮を細く裂いて鍋に加える。



図 26 dun の木



図 27 アルミ鍋での煮沸
saman の樹皮に dun の葉を加え、水とともに煮ると
赤くなる。



図 28 赤色染料 *dun* で彩色する Edith Yanten
筆にはパンダナスの実の繊維を用いる。
(Airara 村にて)



図 29 完成した *amoa kayan*
(一般紋様、109 × 32cm)

(2) 赤色染料の彩色 (図 24~29)

赤色染料 *dun* で彩色する。*saman* の樹皮と *dun* の葉を水とともに 30 分以上、2~3 時間土鍋で煮沸すると、だんだん赤色が濃くなる。今日では土鍋のかわりにアルミニウムの鍋をつかうことが多い。一晩冷まして、翌日再度煮沸するとさらに赤くなる。鍋から熱い染料を施すのが伝統的なやり方で、そのほうが鮮やかな色になるというが、今日ではペットボトルに保存した冷めた染料を使うこともある。

タパ制作には力と根気が要るが、さほど困難な技術だとは思えない。一枚のタパを叩きのぼすのに約 1 時間、施文と彩色にそれぞれ約 1 時間で、たいした手間でもない。タパの製法に重要なのは施紋である。パターンには、神話や伝説、民族の来歴や物語、掟やタブーなどの象徴的意味がもり込まれている。この地方のタパは、タパという物質よりも紋様とそれにまつわる曰く因縁など、無

体の知的創作物に価値がおかれる。

神話・伝説・音楽・デザイン・技術などは代々氏族に伝えられるが、タパの技術や紋様も例外ではない。とくに他氏族が紋様を盗用することは許されない。われわれの社会でも、発明、考案、著作などを支配しうる権利を無体財産権といい、近代の大量生産時代になって重要視するようになった財産管理の考え方で、その実際的な保護に関しては、しばしば裁判沙汰にもなるほど複雑だが、パプアニューギニア社会では、名誉と威信にかけてそれが保護されてきた。

かつて、とくに紋様や施紋に関してタブーとされるものが多かった。男や子供は *dun* を鍋で炊く火のそばに座ることは許されず、彩色しているところを見ることも許されなかった。女は彩色している間、食事をすることも禁じられた。村の老女によれば、赤い染料を *dun* と呼ぶと光になるので（色が褪せるので）、染料を尊重して *tambuta* または *taabuta* と呼ばなければならなかったという (Rebecca Ifugari 83 歳、Sia clan、Marua 村) (Hermkens 2005 : 85)。Hermkens と Barker は「*taabuta* とは赤い血を意味する」として、タパの紋様の蛇行する赤い線を考えると、布や肌に描かれた静脈が蛇行しながら走り、生命を生み出していると解釈することができるなどと、赤い染料に関する禁忌や儀礼的な扱いについて、生殖との関連性から分析をすすめている。「*dun* の儀式的な生産と使用は少なくとも 1930 年代まで行われていた」と指摘される (Hermkens 2005 : 86) とおり、儀式的な意義の記憶は Maisin の人々にとっても、すでに遠い昔のこととなっている。

(3) 収集資料

Maisin の村に滞在中、できるだけ多くの氏族の紋様のタパを収集することを心がけた。Maisin の古いタパはほとんど氏族の紋

様だといわれている。しかし過去のタバについて今日では紋様の意味や名前を知ることはもちろん、氏族の紋様であるのかないのかを確認することすら困難である。過去の紋様について知るためにも、今日知ることのできる氏族の紋様について、すこしでも多くの情報を得ることが大切だ。しかし村人は氏族の名誉に関わるタバを手離すことを躊躇する。「タバを売るには、氏族全員の同意が必要だ」との説明を度々聞かされた。結果的には村に滞在中、以下の11点を収集することができた。それらの写真を、紋様名(意味)、氏族名、制作者、製作年、産地、サイズとともに以下で紹介する(図30、番号は本文に対応する)。

1. *evovi, babaru dova* (氏族の象徴となる七つの子安貝の胸飾り、右の写真はモチーフとなった胸飾り、16×16cm)、Karus clan, Win dom Kasona (56歳、1964生、男、1980年ころからタバ作りを母 Tilly より習う)、2019 創作、新しい創作紋様が確認できた例、Ganjiga, Maisin, 59×51 cm。
2. *evovi, fie mera* (鳥の尾の意、Lavinia という名の女が夢でみた架空の大鳥、エミュやクジャクのように尾が長い)、Karus clan, Nancy Bundu (38歳) 作、2016-17 制作、Ganjiga, Maisin, 145×75cm。
3. *evovi koifi, gavauru* (山の意、ワラビの耳を意味する *uren kari* の紋様もある)、Kaufea clan, Rebecca Gageyo (Yamakero village から嫁ぐ、1942生、夫は Corah Gegeyo)、2019 制作、Uiaku, Maisin, 248×42cm。この紋様は、四つのクラン Kaufea, Aisore, Kanyaru, Yabiva の共有。房飾りは *foke* (Kaufea clan 独自の名)。
4. *evovi, vaga* (とくに意味が認められない「紋様」の意)、Danumu clan, Florence Koifo (約60歳) 作、Airara, Maisin。この紋様は、Mainu, Wofung, Wondi などの clan も用いる。房飾りは *surega* という。142×80cm。
5. *evovi koifi, vaga* (「4」と同様、とくに意味が認められない「紋様」の意)、Danumu clan, Florence Koifo (約60歳) 作、Airara, Maisin。この紋様は、Mainu, Wofung, Wondi などの clan も用いる。房飾りは *surega* という。270×28cm。
6. *evovi, damana* (星または海星ヒトデの意、Mainun Bogege という祖先が海にあった星を網で捕らえて、それがクランの紋章となった)、Mainu clan, Lina Yaumo (40歳) 作、Marua Station No. 2, Maisin。この紋様は Wofung, Wondi clan も用いる。140×86cm。
7. *evovi koifi, damana* (「6」と同じモチーフ、*damana* は星または海星ヒトデの意、Mainun Bogege という祖先が海にあった星を網で捕らえて、それがクランの紋章となった)、Mainu clan, Lina Yaumo (40歳) 作、Marua Station No. 2, Maisin。この紋様は Wofung, Wondi clan も用いる。250×34cm。
8. *evovi, mare itati* (亀甲の櫛を意味する。三角部分が柄で、四角の格子が櫛の部分)、Sia のなかでも Seita clan に属する。Jospine Bendo (50歳) 作、Marua Station No. 2, Maisin、1990年代に Marua Point が海浜浸食で住めなくなり村を内陸部に移築。125×68cm。
9. *evovi, tutuki* (バツタの意、頭・目・触覚などを表現)、Wondi/Joba clan, Freda Namii (1952生、夫は Gideon Ikosi Naimi 65歳、Iris Wea の兄の子供)、2017 制作、Uiaku, Maisin。100×54cm。Joba clan の紋様には *tutuki* (バツタ)、*kasimon* (柵)、*biraa* (サイクロン)、*seseme* (ヒトデ)、*siroro* (シダ) がある。

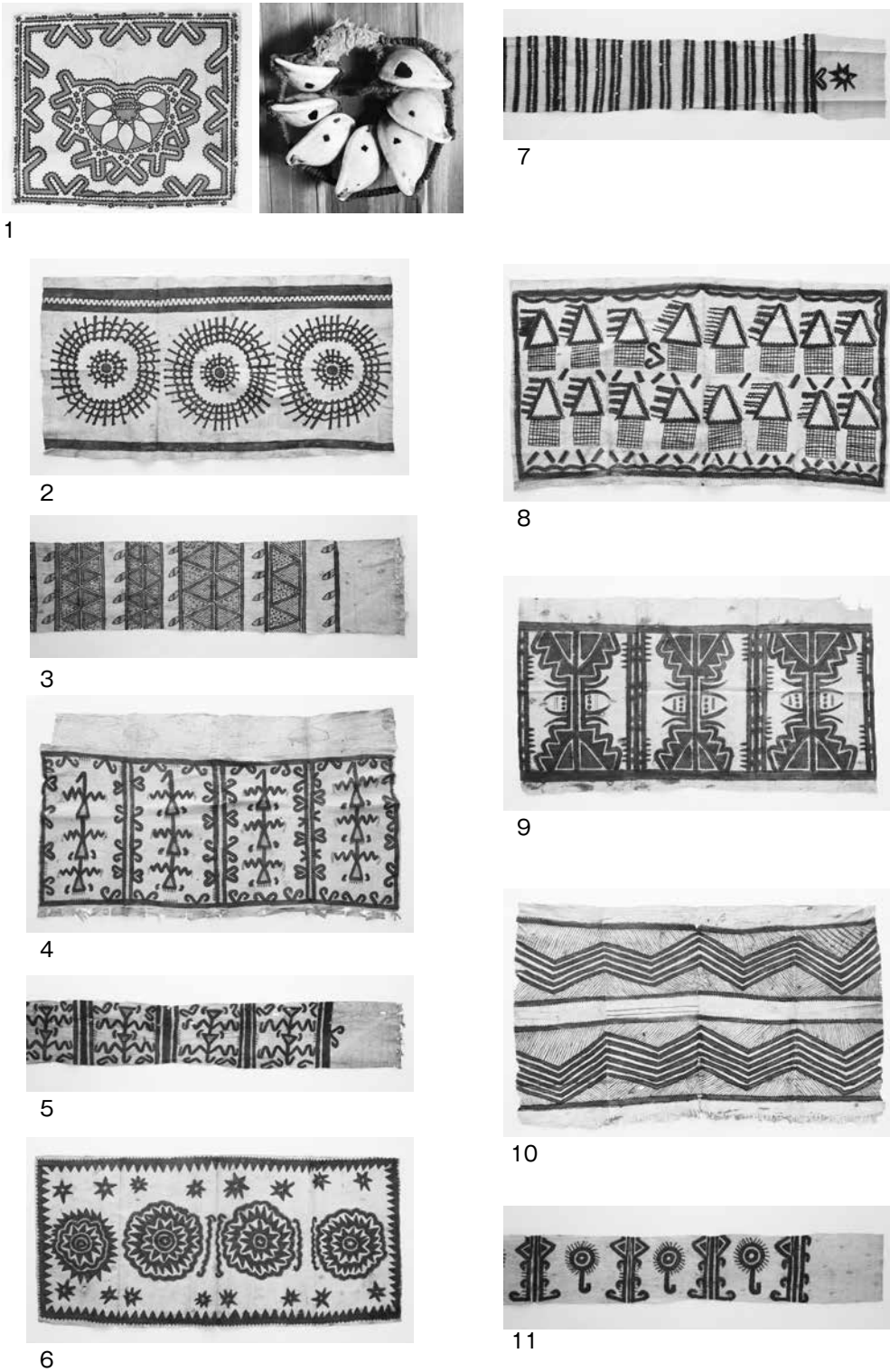


図 30 収集資料一覧

10. *evovi, begati yeta* (畑のなかの道を意味する)、Tatan clan, Edihi Yabosua (1946 生、夫は Razarus Yanten)、2019 制作、Marua, Maisin. 120×73cm。
11. *evovi koifi, kekesi* (ニワトリ *biyoki* の白い羽毛の頭飾りを意味する)、Waigo clan, Adlealei Dave (1989 生、夫は Joe Dave 1987 生) 作、2019 制作、Airara, Maisin. 237×24cm。

V MacGregor コレクション

ポートモレスビーの国立博物館 National Museum and Art Gallery 所蔵の MacGregor のコレクションは、タバだけでも 100 点以上あり、古い時代のタバを知るうえでも貴重な資料となっている³⁾。

Sir William MacGregor (1846-1919) は、イギリス領ニューギニアの最初の行政官として任命され、1888 年から 1895 年まで行政官を務め、1895 年には副総督に就任した。2 年後に辞任してニューギニアを去った。パプアのほぼすべての航行可能な川を探検し、島を横断、最も高い山にも登った。彼は、自分の行動によって古来の伝統が変わることを認識して、村人の意志を尊重しつつ、できるかぎり多くの資料収集に努めた。その詳しい行動が Anna-Karina Hermkens の著書にまとめられている⁴⁾。

ポートモレスビーの国立博物館では、館長の Andrew Moutu 氏と Grace Guise-Vele 氏 (acting chief curator) の協力を得て、MacGregor のタバ・コレクションを観察することができた。収蔵品カード 100 枚余りを複写し、倉庫の引き出しに梱包された実物のタバ 20 点を解梱して観察し撮影した。

今回観察できたのは 20 点のタバのみだった。タバに黒と赤の二色で紋様が手描きされ

ていることに、その後のタバとのちがいはなかったが、赤色は、褪色が目立つものや、よく色彩を残しているものがあった。黒色はほとんど褪色していないようだった。一方紋様の表情は後年のものとずいぶんちがうように感じた。近年のものは黒で均一の中を描いた平行曲線のなかに、黒線をはみださないように赤が彩色されているという様式が顕著だが、そのような様式にとらわれないかのように、自由闊達、奔放、多様、素朴な描線がみられる。またタバの生地に、ていねいな縫いによる継ぎ合わせ、重ね合わせがあるものが数点 (カード番号:M4994, M5006, M5055 など) 確認できた。後年のタバには認められなかった加工である。後年のタバのような巨大なタバはなく、それほど大きくないものに継ぎ合わせや重ね合わせがあるということは、かつては大きく分厚いタバの生地を得ることができなかったのか、白くやわらかな品質を求めたため、わざわざ小さくやわらかなタバの樹皮を用いて継ぎ合わせたのか不明である。理由を解明するためにも、材料となるタバの木の種類を今日のものと比較する必要を感じた。その一部の写真を以下に掲載したい。なおタバ数点の微細な断片を DNA 鑑定のため許可を得て持ち帰った (図 31)。

VI おわりに

筆者による今回の探査行は、当初の 1969 年から 51 年、最後の 1990 年から 30 年ぶりのパプアニューギニア訪問となった。今回気づいたのは、人々の生活や文化はたえず変化するという当たり前のことだった。今回はタバに特定して探査をつづけ、130 年前の MacGregor コレクション、自身がかかわった数十年前のタバ、そして現代のタバを比較する機会を得た。そこにみられた差異や変化

MacGregor Collection
 GEOLOGICAL SURVEY - ANTHROPOLOGICAL DIVISION
 CATALOGUE RECORD BOOK

Registration No. M4988 Specimen No.

Locality: MONI VALLEY
 Description and Dimensions:
 Date 1887

Function:

Local Name:

Dimensions: Length: 124 cm Max. width: 82 cm
 Weight: gm

Locality: MONI VALLEY Region: GUYANA
 Map Reference: Paper No. 1000

Collector: Date:

Source: BY THE GUYANAN GOVERNMENT Date: 18 Nov. 1901
 Transferred to Collection Purchase Gift

Catalogued by: GUYANA Date: 10/10/57

Catalogue History: by MacGregor 1887-1891

History:



1. M4988 (124 × 82cm, Moni Valley, 1887)

MacGregor Collection
 GEOLOGICAL SURVEY - ANTHROPOLOGICAL DIVISION
 CATALOGUE RECORD BOOK

Registration No. M5031 Specimen No. B.S. 1011

Locality: MUSA RIVER
 Description and Dimensions:
 Date 1888

Function:

Local Name:

Dimensions: Length: 124 cm Max. width: 82 cm
 Weight: gm

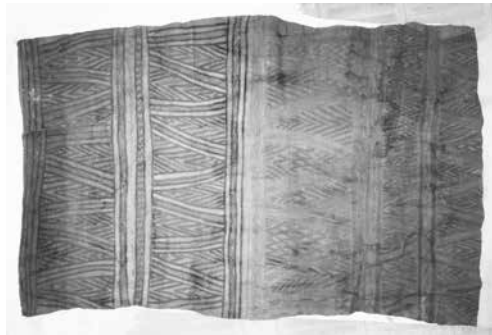
Locality: MUSA RIVER Region: GUYANA
 Map Reference: Paper No. 1000

Collector: Date:

Source: BY THE GUYANAN GOVERNMENT Date: 18 Nov. 1901
 Transferred to Collection Purchase Gift

Catalogued by: GUYANA Date: 10/10/57

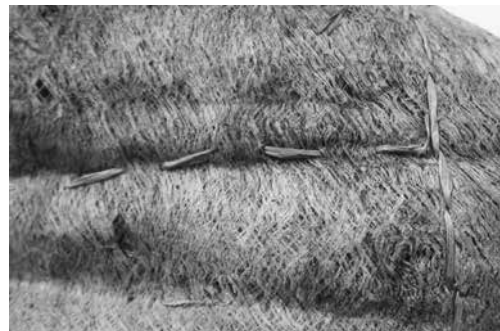
Catalogue History: by MacGregor 1888-1891



2. M5031 (124 × 82cm, Musa river, 1888)



3. M4991 (123 × 61cm, Moni Valley, 1888) わずかに赤色が残る。



4. M5055 (104 × 69cm, Musa river) 縫い合わせがあるが、その部分に黒線が描かれているため目立たない。右写真は裏面部分。縫い目と接ぎ合わせがわかる。

図 31 MacGregor コレクション

は、予想を越えるものだった。うかつにも私は、南太平洋美術は伝統的な民族美術であって、現代美術のように時代とともに新しく変化するものではない、などとどこかで決めつけていたのかもしれない。民族芸術と現代美術は、民族という集団区分か、現代という時代区分かのちがいで美術をとらえるもので、現代の民族美術は現代美術でもあり、民族性を感知できる現代美術は民族美術でもある。パプアニューギニアの密林や海に住む人々も、われわれと同じく時代と地域に生きている。それぞれの時代のタパは、その時代と地域の息吹をみせている。

42年ぶりの変化に接して後悔したのは、以前の資料収集の際、資料の詳しいデータ収集まで十分に手がまわらなかったことである。当時、資料の収集には緊急性を要した。現地では世界からの商人をはじめ、教会や行政のパトロールオフィサーなどがこぞって競争し、世界のマーケットへ美術品が根こそぎ持ち出されるという勢いだった。私は毎回の探査行にあたって、資料収集と調査活動のどちらかに重点をおかざるを得なかった。コレクションを依頼され、潤沢な資金が用意されたときは資料収集に専念し、それ以外は自前の好奇心と乏しい資金で自由な探査行をつづけた。質の高い美術品を数多く入手するには、美術商から間接的に購入するのがもっとも早かったが、私は現地で住人から直接入手するように努めた。人々の生活に密着したものとして美術品をとらえたかったからである。うかつだったのは、コレクションの詳しいデータ収集は、後日専門の研究者に委ねることまでできるだろうと期待したことだった。

今回、以前のコレクションについて試みたデータの追収集は不調に終わった。人々の生活や文化は、それぞれの時代に呼応したもので、過去の記憶は薄れ、過去について十分な

情報を得るには手遅れになる。失われ変容してゆく伝統を嘆くよりも、時代の変化に応じて変容する姿の奥に、文化の本質を見いだすべきではあろう。

今回、パプアニューギニアの日本大使館一等書記官の岩本洋光氏と、PNG 国立博物館 National Museum and Art Gallery の館長 Dr. Andrew Moutu らとの懇談の場で、PNG 国立博物館におけるタパの展覧会開催の構想が持ち上がった。実現の見通しはまだないが、未公開の MacGregor タパ・コレクションと、筆者私蔵の約 50 年前のコレクション、今日のタパなどを同時に比較展覧することができれば、興味深く意義もあるだろう。現地の人間文化は複雑、深遠に発達している。南太平洋美術の魅力を読み解くためにやるべきことは山積している。

注

- 1) 筆者の南太平洋探査歴は以下のようなものである。1969年、京都市立美術大学ニューギニア美術調査隊参加、70日間、京都市立芸術大学芸術資料館所蔵約320点の美術品収集。1970-71年、パプアニューギニア、ソロモン諸島、ニューヘブリディーズ探査、132日間。1971-72年、パプアニューギニア、セピック河地方美術品収集、107日間、国立民族学博物館収蔵資料約400点収集。1973年、パプアニューギニア、ソロモン諸島、ニューヘブリディーズ探査、87日間。1978年、トロブリアンド島探査、15日間。1978年、第一次エンバ美術探検隊参加、その後単独でメラネシア、ポリネシア探査、74日間、丹波市立植野記念美術館所蔵土器・木彫など数百点収集。1979年、第二次エンバ美術探検隊参加、セピック河地方、43日間。1980年、じゅらくパプアニューギニア訪問団参加、7日間、タパ・木彫など百数十点収集。1982年、ソロモン諸島、バヌアツ、フィジー、トンガ、サモアヘタパ調査収集、43日間、タパなど百数十点収集。1985年、ハワイ訪問、20日間。1990年、パプアニューギニア、ソロモン諸島、バヌアツ探査、40日間、信楽陶芸の森美術館所蔵土器など数百点収

- 集、編布・装身具など数百点収集。
- 2) 近年に私蔵タパを展示した展覧会は以下のようである。秋季特別展「タパの美 - 南太平洋の始源布」大阪日本民藝館、吹田、2005。「南太平洋の始源布」丹波市立植野記念美術館、丹波、2005。Decorative Culture-Oceania, FUKUMOTO Shigeki Collections, 第5回清州国際工芸ビエンナーレ 2007, Crafts : A Mode of Life、清州、韓国、2007。「Fuya & Tapa : Bark Cloth Traditions in Indonesia and Oceania」Museum Tekstil Jakarta、新聞社 Kompas, Bentara Budaya、ジャカルタ、2013。「織物以前、タパとフェルト」LIXIL ギャラリー、大阪、東京、2017-18。「衣の原点—南太平洋諸島の樹皮布、編布など」岩立フォークテキスタイルミュージアム、東京、2017-18。
 - 3) MacGregor のコレクションは、クイーンズランド博物館 (Brisbane) によって取得され、一部はオーストラリア博物館 (Sidney) とビクトリア博物館 (Melbourne) に送られた。1975年のパプアニューギニア独立後、ブリスベンのコレクションの一部はポートモレスビーにあるパプアニューギニア国立博物館に返還された。MacGregor の個人コレクションはスコットランドに送られ、現在はアバディーン大学の Marischal Museum に収蔵されている。(Hermkens 2005 : 85)
 - 4) Hermkens の著書『Engendering Objects』に Sir William MacGregor の行動がまとめられている。以下に要約する。MacGregor は行政官に任命されてから2年後、コロニーの北東海岸を探検し始めた。1890年から1895年の間に少なくとも5回はCollingwood 湾を訪れた。1890年、宣教師 Albert MacLaren とともに Collingwood 湾と Sinapa と Uiaku の Maisin 村を訪れた。彼らは Collingwood 湾に入った最初の白人だった。MacGregor は1892年10月にクイーンズランド博物館が収蔵することになった工芸品を収集した。これらの Collingwood 湾の工芸品の大部分は手斧で、そのうちのいくつかは Maisin のものだと明示されている。クイーンズランド博物館に収蔵された他の Collingwood 湾の工芸品は、編み袋、石灰の籠、戦闘のお守り、ネックレスやイヤリングなどの装飾品だった。MacGregor がこの旅の間にタパを収集したかどうかは不明だが、Collingwood 湾の

タパがクイーンズランド博物館に収蔵されたのは、MacGregor の最後の Collingwood 湾への旅の後になってからである。最初の訪問から3年後、MacGregor は再び Collingwood 湾を、MacLaren の後継者の Copland King とともに探検した。1893年9月、King は MacGregor とともに、ドイツ領との国境近くの Mambare 川までの海岸沿いを2週間かけて探検した。半年後、MacGregor は再び北東に向かった。この探検の旅の間に、彼は未踏地を訪れ、1894年4月3日から10日まで Musa 川に初めて入った。MacGregor は Musa の人々、特に彼らのタパ布について熱心に記述している。MacGregor はわずか数日で、Musa 川下流の樹皮布を63枚購入したが、その中には Musa 川沿いで収集されたと登録されている2枚も含まれている。これは、Musa 族、Oro 州における植民地時代の樹皮布の最大のコレクションであろう。クイーンズランド博物館は1896年にこれらの樹皮布を取得した

謝辞

本稿は琉球大学2019年度 琉球大学島嶼地域科学研究所 公募型共同研究の助成を受けた「南太平洋島嶼地域におけるタパ(樹皮布)の未公表コレクションの調査およびタパ素材植物の樹種と系譜の研究」(研究代表者 矢野健一)の成果の一部である。成果の一部は2020年9月8日に琉球大学(沖縄県西原町)でオンライン方式で開催された「琉球大学島嶼地域科学研究所個人型共同利用・公募型共同研究合同報告会」で発表している。島嶼地域科学研究所所長の藤田陽子先生と受入対応教員の琉球大学佐藤崇範先生に感謝申し上げます。

参考文献

- Williams, Francis E. 1930. *Orokaiva Society*. London : Oxford University Press.
- Cromwell Barau 1967. *Peoples of the Pacific 18; The Orokaiva*, Wilke & Co., Ltd., Melbourne.
- Beattie, W. 1973. *IRIS, tapa cloth maker*, Cultural Studies Committee, Papua New Guinea.
- G. N. Mosuwadoga 1977. *Traditional Techniques and Values in the Lower Musa River*, National Museum and Art Gallery, Port Moresby.
- Anne Leonard and John Terrell 1980. *Patterns of Paradise, The styles and significance of bark*

- cloth around the world*, Field Museum of Natural History, Chicago.
- Barker, John 2008. *Ancestral Lines, The Maisin of Papua New Guinea and the Fate of the Rainforest*, Broadview Press.
- Hermkens, Anna-Karina 2013. *Engendering Objects, Dynamics of Barkcloth and Gender among the Maisin of Papua New Guinea*, Sidestone Press, Leiden
- Hermkens, Anna-Karina & Barker, John 2017. Maisin tapa in the outside world, *TAPA, From Tree Bark to Cloth: An Ancient Art of Oceania from Southeast Asia to Eastern Polynesia*, Association, pp. 103-104. TAPA, Tahiti.
- 山本真鳥編著 2000 新版世界各国史 27 『オセアニア史』 山川出版社。
- 福本繁樹 1976 『メラネシアの美術』 求龍堂。
- 福本繁樹 1979 「パプア・ニューギニア マイシン族のタバ」『染織と生活』 No.25、染織と生活社。
- 福本繁樹 1983 『タバ 南太平洋の樹皮布』 じゅらく染織資料館。
- 福本繁樹 1985 『南太平洋・民族の装い The Fantastic Costume Art of Oceania』 講談社。
- 福本繁樹 1996 「タバ」「マイシン族のタバ」『染み染み染みる日本の心「染め」の文化』 淡交社、pp.148-161。
- 福本繁樹 1996 「装いと美の演出—タバ」週刊朝日百科 96 『植物の世界』 朝日新聞社、pp.234-239。
- 福本繁樹 1998 「南太平洋の染織文化」『民族藝術』 Vol.14 : 27-36 民族藝術学会。
- 福本繁樹 2005 「太陽に輝く樹皮布 南太平洋のタバ」季刊『銀花』 2005 年秋号 / 143 号、文化出版局。
- 福本繁樹 2006 「オセアニアにおける紙の歴史と文化」『紙の文化事典』 朝倉書店、pp.81-84。
- Fukumoto, Shigeki 2013 'TAPA : Tradisi Kain Kulit di Oceania', *Fuya & Tapa: Bark-cloth Traditions in Indonesia & Oceania*, pp.24-30, 44-57, 74-75, Museum Tekstil, Jakarta.
- 福本繁樹 2017 「南太平洋のタバ」『LIXIL BOOK LET 織物以前 タバとフェルト』 LIXIL 出版、pp.9-42。

【2020 年 10 月 31 日受理】

Report on Revisiting Tapa Making Villages in Papua New Guinea

FUKUMOTO Shigeki¹

Abstract : Between 1969 and 1990 the author made over ten visits to countries in the South Pacific region to investigate their art, spending a total period of more than two years there. Almost all the old masks and religious images had disappeared, but there was still a strong continuity in some traditional craft objects such as earthenware vessels, shell money, body ornaments, "mat money" made of pole wrap with stencil dyeing, and tapa (bark cloth) . I visited a number of regions to learn about their unknown art forms, took numerous photographs of the people's lifestyle and art, and encouraged the collection of art objects. I made no more visits to the South Pacific thereafter, but in February 2020, just as the coronavirus was beginning to take hold, I returned to Papua New Guinea and spent 15 days revisiting the Maisin people of the tapa-making villages I had visited 42 years earlier.

Tapa is a primitive cloth that was made the world over, still produced today primarily in tropical regions and used mostly for clothing. On my return to Papua New Guinea I took with me over 100 photographs of the tapa collection I had made there decades earlier, with the aim of making a new data collection. I studied the current tapa-making process, found trees in the jungle that I believed were the original type whose bark was used for tapa production, and asked the villagers to make tapa samples from this bark. I then returned to Japan with the trunks, bark and tapa samples. I also had the opportunity of visiting MacGregor's tapa collection held in the PNG National Museum and Art Gallery.

Keywords : Tapa cloth, Papua New Guinea, Maisin people, MacGregor's collection

1 : Research Center for Pan-Pacific Civilizations, Ritsumeikan University